



# ピースデポ

## 平和資料協同組合

Peace Depot (Peace Resources Cooperative)

# 会報

No.24

2009.4.15

発行人：湯浅一郎／住所：〒223-0062 横浜市港北区日吉本町1-30-27-4 日吉グリーンネ1F  
TEL:045-563-5101 / FAX:045-563-9907 / E-mail:office@peacedepot.org  
郵便振替：00250-1-41182 特定非営利活動法人ピースデポ  
銀行口座：横浜銀行日吉支店 普通 1561710 特定非営利活動法人ピースデポ

## 第10回総会報告

# 核廃絶へのチャンスを 活かすために 一人一人の力を



湯浅一郎 (ピースデポ代表)

米国発の金融破たんによる世界規模の同時的な経済危機により、雇用不安が世界規模で発生し、生活そのものが思うに任せない状況が広がっています。そうした中で、米国にオバマ政権が誕生し、様々な領域で政治の変化が叫ばれ、核軍縮においても「核兵器のない世界」へ向けた動きが始まっており、それに呼応する市民の側からの動きが求められています。そのような情勢の中で、2月22日、ピースデポは全水道会館(東京)で第10回総会を行いました。前日、日本青年館で記念イベントを行い、被爆地を象徴する土山秀夫さん、平岡敬さんから、いわば人生を語っていただき、世代を超えた交流をしたばかりで、それぞれがどう生きていくのかの想いを持っての総会になりました。正会員の岩淵美智子さんの議長のもと、総会の成立を確認し、08年の事業報告と収支決算報告を中村事務局長が行い、質疑の後、採決が行われました。その後、09年度事業計画案と収支予算案を湯浅が提案し、活発な質疑討論のあと、方針が採択されました。

08年も慢性的な財政の困難を踏まえつつ、事務局2人スタッフ体制を保持し、理事会、運営委員会で運営状況をチェックし、経営のあり方を微調整しながら歩むことで、当初、見込んだ110万円の赤字予算よりもやや少ない赤字幅ですみました。スタッフ2人体制を安定的に維持していくためには、今一つの会員の拡大、販売物の拡販が必要です。会員は、08年末で504名、モニター購読者166名の計670の個人・団体で、会員数が前年比で正味11人増になりました。毎年、50人以上の退会者が出ている中で正味増はかなり大変な仕事ですが、これを毎年少しずつでも継続することが重要です。更に組織的には、08年に代表を交代し、世代交代

を進めてきましたが、まだまだ不十分であり、09年は大きく一歩ふみ出さねばなりません。

また討議では、ファンドレイジング(資金開拓)が大きな話題となりました。調査委託の開拓、会員増、寄付など、様々な領域が想定されますが、一つ一つ意識的に、戦略的に構想していくことが求められています。ピースデポとしてそうした点を意識的に追求していくことの重要性が確認されました。

08年は、事業面で中心的に取り組んだ「北東アジア非核兵器地帯を求める世論形成」にとって大きな前進が2つありました。日本非核宣言自治体協議会が、5月の総会で北東アジア非核兵器地帯を進めるキャンペーンを取り上げ、宣伝媒体の作成を予算化しました。8月には民主党核軍縮推進議員連盟が北東アジア非核兵器地帯条約案を作成し、長崎で発表しました。09年は、こうした流れをより具体的に広げていき、2010年のNPT再検討会議に向けて「核兵器のない世界」をめざした国際的な動きに北東アジア市民からの声を共鳴させていく1年にせねばなりません。ピースデポは、そのために北東アジア非核兵器地帯への支持を求める国際署名を開始し、北東アジア非核兵器地帯が国際的に幅広く支持を受け、また地域における安全保障を求める運動が世界規模の核兵器廃絶にも大きな意義を持つことを訴えていくべく、5月、ニューヨークで開催されるNPT再検討会議準備委員会の会場で、ワークショップを企画しています。

日本にはこの種のNGOはほとんどなく、経営を軌道に乗せるには、まだまだ努力が必要です。何よりもピースデポという存在が日本の市民社会に必要であることを理解し、支えていただける方

を増やし、結果として会員が増えていくという構造を作り出さねばなりません。皆さんの周囲で会員になっていただき、支えの一助になっていただける方を紹介していただけますようお願いいたします。

### 湯浅代表の横顔をお伝えします！

昨年就任した湯浅代表には、海洋研究者としての顔があります。これまでの活動の原点と、生活者・科学者としての人間観に迫りました。(聞き手：塚田晋一郎)



#### ○湯浅代表の原点は？

——私が大学に入った1969年当時、世界的に言えばベトナム反戦運動があり、国内的には水俣を始めとした公害問題が社会的に大きな問題になっていました。私は地球物理学を専攻していましたが、自分自身が生活者・市民であり、一方で研究者になりたいという思いから、科学技術の在り方を問う具体的な媒介として、瀬戸内海などの公害問題に関わるところからスタートしました。

#### ○平和運動へのきっかけは？

——きっかけは、反原発運動に関わったことでした。最初から平和問題に強い意識があった訳ではないのですが、原発に関わる中でずっと核兵器の存在が頭にありました。核兵器は、核分裂が発見されてからわずか数年のうちに作られ、第二次大戦後の世界を支配するための道具として使われていきました。純粋物理学と政治とが直結している問題に対して、ちゃんとした答えがないわけです。アインシュタインなどの原子核物理学の研究者たちは、研究が悪用されていく現実と直面し、パグウォッシュ会議などを作りました。私の研究は直接その分野ではありませんが、科学技術の社会的責任において、自分たちの研究と社会との関わり合いが常に問われているという意味では同じだと思います。

#### ○湯浅代表の考える、人間のあるべき姿とは？

——「どうあるべきか」はなかなかわかりませんが、いま自分がここにいることの意味についてはそれぞれの人々がちゃんと考えた方がいいだろうと思います。現段階の認識として、1つは“人間は宇宙の中では所詮大した存在ではない”ということです。私は学生時代に「宇宙のカビ」と人間を規定していました。ささやかで、かつ寄生している。しかしもう一方では、人間は奇跡的な存在であるという二面性があります。

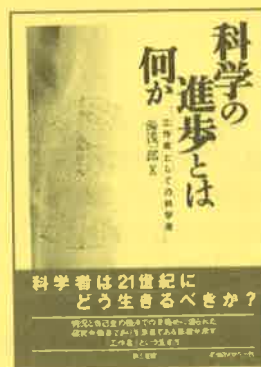
#### ○「カビ」でありつつも、「奇跡」なんですね。

——はい。惑星上に生命体が存在するための物理的な条件は、ごく単純化すると、太陽との距離と惑星の大きさです。地球の平均表面温度は15℃ですが、火星では二酸化炭素も個体になる-50℃で、金星では表面温度が400～500℃にもなり、水はほとんど存在しません。水が固体・液体・気体になり得るのは太陽系では地球のみです。また、月の大きさでは重力が小さすぎて、海や大気を維持できません。銀河系には太陽(恒星)が約2000億個あると言われていますが、地球のような惑星を持っている恒星はそんなにありません。地球はまさに、「奇跡の星」といえます。

地球は46億年前に誕生したといわれていますが、人間社会はほんの1～2万年の間に作られてきました。こうした視点に立つと、同じ時間に生きている人間というのは、どんな人間であっても、そこに存在していること自体、価値の高いことだと思います。その観点を持って、今を生きる。今という時間に地球上に存在しているもの、植物もそうですし、虫や鳥、その全てが存在としては、等価、等しいものであると考えるべきではないでしょうか。そこから、民族や歴史性の違い、そして軍事力で物事の解決を図るロジックなどを超えられるような自然観・人間観が形成され、1つ違った次元で大きな変革があり得るかなという気がしています。

湯浅一郎 著

『科学の進歩とは何か』2005年 / 第三書館刊



## 総会で決まった今年の主な事業計画

全文はホームページ  
[www.peacedepot.org/whatspd/actvty1.hum](http://www.peacedepot.org/whatspd/actvty1.hum)

### ● 基本方針

1. 核兵器廃絶の国際的な世論形成への寄与
2. 「北東アジア非核兵器地帯」を推進する活動
3. 軍事費を削減し、社会開発への投資を求める国際的な共同行動への関与
4. 自治体と市民の連携した力を引き出す取り組みの継続
5. モニター刊行や出版事業の意義を再確認し、いっそうの定着、拡大をめざす
6. 会員、支持者のネットワークの拡充と活用

### ● 事業プログラム

1. 核兵器廃絶への機運醸成、世論形成への積極的関与
2. 「北東アジア非核兵器地帯」促進に向けた取り組みの強化
3. 軍事費削減を求める運動に資する調査活動の立ち上げ

4. 核兵器・核実験モニターの発行
5. イアブック「核軍縮・平和」の発行と販路の拡大
6. 「ピースデポ・ブックレット」、「ワーキング・ペーパー」の発行
7. 米軍、自衛隊の動向調査
8. 海外活動への派遣、核軍縮・不拡散議員連盟(PNND)支援、執筆、講演、取材協力、セミナー開催など継続する活動

### ● 組織体制の整備

1. 常勤スタッフ2人体制の継続
2. 運営委員会と将来計画委員会の継続
3. 会員、モニター購読者の拡大：数値目標の設定
4. 人的ネットワークの拡充・活性化に向けた施策

## 総会への会員・助言者からのメッセージ

総会に向けて、今年も多くの会員の皆様から激励、ご提案をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。メッセージの一部をご紹介します。できるだけ多くの方のメッセージを掲載するために抜粋紹介となることをご了承ください。(敬称略・順不同)

- 新オバマ政権による米国の戦略の動向が、日本の基地返還に影響するので、こうした分析を期待します。(二宮敬嗣)
- 核廃絶への新たなうねりが起きつつある今、ピースデポの力に期待大です。(杉田明宏)
- “モニター”の内容のすばらしさにひかれ、正会員となりました。講演会などにはできるだけ出席したいと思っております。(中山節子)
- 2007年7月、広島で開催された原爆を裁くための「国際民衆法廷」のことが、イアブックになぜ掲載されていないのか疑問に思いました。(花井喜六)
- ピースデポの活躍、期待しています。核保有国の核政策推進者であった元政府高官の「核軍縮」の意図については、分析を進めてほしい。反テロが中心としたら、その限界についての指摘が必要でしょうし、ICNND日本NGO連絡会の結成集会の時に、「進歩した通常兵器で核の役割は代替できる。だから核廃絶を」という主旨の意見にはびっくりしましたが、これへの批判が必要だと思います。(大場幸夫)
- 急激な世界の流れに、新たな世界が定まるのでしょうか。とにかく争いのない平和な時代を祈るしかありません。オバマさんに期待し、人間社会の理想を目指し平和な時代に少しでも近づくよう切望しております。(大澤一枝)
- 「北東アジア非核兵器地帯」構想の実現に向けて世論を喚起する上で避けて通ることができないのが、いわゆる拉致問題だと思います。日本国内では「北朝鮮」といえば真っ先に「拉致問題」です。メディアの誘導なのかもしれませんが、拉致問題を差し置いて北朝鮮の核を語ることは今の日本では非常に難しいような気がし

- ます。このような現実にはどのように対応すればよいのでしょうか。(鶴飼礼子)
- オバマ政権の民主党が核兵器廃絶に取り組むとは思わないが、オバマ大統領が就任演説で「核の脅威を減らし、不断の努力を行う」と述べたことに、核廃絶への道が開けたと期待しています。長崎からは5月のNPT準備会議に訪れ、あらためて核兵器の非人道性を訴えたいと考えています。(森口貢)
- 多方面に気配りされた議案書づくりで、読みやすい内容となっていました。役員改選・承認などは省略するシステムになったのでしょうか？発展のためにも人事・運営担当などは毎回記入されるべきではないかな、と思いました。ご盛会を祈念します。(緒方毅)
- 「平和学会賞」おめでとうございます。引き続き、地道で確実な御活躍を支援いたします。(八谷まち子)
- 湯浅一郎さんとのご縁でピースデポを知り、すばらしい組織だと思い、会員にさせていただきました。できれば仲間をさそいたいと思っています。わかりやすくPRしたいと思いますので、その様な資料を提供いただけると有難いです。できる限り応援します。(中市後千秋)
- 年々若い発送ボランティアの方が増えてきたと思います。(華房孝年)
- 核情報に関する大変な努力に対して感謝しています。もっともっと会員を増やし、日本政府の非核三原則の法制化の世論を高めたいと思います。(利元克巳)
- 長い間、地道な努力を続けてこられた貴重な調査が成果をあげて来ていますね。敬意を表します。(竹村泰子)
- コープの平和活動を伊勢原では細くならないよう仲間と続けております。大きなことはできませんが1人でも毎年平和

- を考えて、一緒に行動できる方が増えることを希望して、みんなで知恵を出し合ってがんばっております。(吉野邦子)
- 「核兵器・核実験モニター」について編集方針を継承しつつ、外部執筆者の拡充に力を入れること、賛成です。「事業プログラム」は、いずれも重要な事柄だと思います。そこで、さらに仕事を増やす提案はしづらひと感じますが、若手活動家の育成も充分念頭において、調査・研究活動を“共同”で行うようなアイデアを温めてきました。特に英語文献の読解、翻訳作業での“共同化”が念頭にあります。(浦田賢治)
- オバマ政権の成立は平和問題に取り組んでいる運動にとって対岸の出来事ではないと感じています。オバマ氏が、ブッシュ8年の悪夢から覚めた膨大なアメリカ合衆国の草の根の人々の「チェンジ」への情熱を呼び覚まし、「勝手連」的な活動のネットワークに乗って当選したことが、この政権をただの民主党政権とはちがったものにしていくからです。ここの一年、いろいろな反戦平和の運動が力を合わせて、アメリカの運動との連携の戦略を立て、協働で実行するという状態が作られる必要があると私は痛感しています。3月にワシントンで開かれる反基地会議はその第一歩となると思いますが、私たちの側で継続的な戦略がなければそれを有効な第一歩にはできないかもしれません。ピースデポ総会がぜひこの可能性を議論され、イニシアチブをとってくださるよう心から期待しています。(武藤一羊)
- 今年、来年とNPT再検討会議に向け非常に重要な時期です。益々ピースデポの資料が貴重なものになります。がんばって下さい。国際的潮流もたしかに少し変わってきていますので。キッシンジャー氏、オバマ大統領らの発言を、真の平和主義者ではないとみる意見もありますが、真意は別にしても、とにかく核兵器はあってはいけない存在です。これをなくすことはすべての世界の民衆の願いです。何が何でも廃絶を！(関千枝子)



### 「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会(ICNND) 日本NGO・市民連絡会」が発足しました！

2008年に日豪政府主導で立ち上げられた「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会(ICNND)」は、2010年5月の核不拡散条約(NPT)再検討会議とその先を見通して、2010年1月に報告書を取りまとめることになっています。1月25日に東京で「ICNND日本NGO連絡会」が発足し、ピースデポはその事務局として活動しています。

「ICNND日本NGO連絡会」ではこれまでに、ICNNDへの公開書簡による提言活動や、公開セミナーを実施してきました。今後も、ICNNDへの働きかけを通じて、私たち市民の声が世界の核廃絶へ向けた動きにつながるよう、取り組んでいきます。

活動の詳細はブログ (<http://icnndngo-japan.wordpress.com/>) をご覧ください。



発足集会の様子

# 「次世代に語りつぐーヒロシマ・ナガサキ・平和」

総会に先立ち、2月21日に日本青年館（東京都千代田区）で、第10回総会記念シンポジウム「次世代に語りつぐーヒロシマ・ナガサキ・平和」を開催しました。

戦後64年が経ち、戦争を知らない世代が定年を迎えたいま、私たちの歴史認識や平和観が問われる様々な問題が起きています。今年の総会記念イベントは、敗戦体験を原点に「戦中派」として、広島・長崎から核廃絶・平和運動を長年にわたり牽引されてきた、平岡敬さん（前広島市長）と土山秀夫さん（元長崎大学学長）のお二人のお話をじっくりとお聴きすることができました。

お二人のご講演に続き、司会の田巻一彦ピースデポ副代表を交



えた鼎談に移り、そして長崎の「高校生平和大使」OGの大学生、大川史織さんから活動報告をしていただきました。

学生さんを含む、約70名の方にご参加いただき、世代を超えた活発な交流が行われました。ごく一部となりますが、お二人のお話をお伝えします。（文責：塚田晋一郎）

## 平岡敬さん：「戦争から学び、豊かで公正な社会を」



私が核兵器廃絶や平和を考える上でいつも大切にしてきたことは、常に人間の視点から物事を考えるという事です。

私自身は8月6日の広島への原爆投下を体験していませんが、敗戦のとき、私の思想と活動の原点となる体験をしました。9日にソ連が参戦し、11日に山の向こうから次々と着の身着のままの

避難民の群れが逃げてきた姿を見た時、「日本はもう負けているんだな」と感じました。私は17歳で丸裸で放り出され、国家は私たちを守ってくれないということを知りました。軍国少年だった私にとっては、明日からの自分の人生がなくなるような大変な出来事でした。しかし8月16日の朝、宿舎の外で一人の朝鮮人の農民が一生懸命畑を耕している姿を見て、国家がどうだろうと自分の手で畑を耕して生きているのが庶民なのだと感じました。9月の末に一家で引き揚げて来た広島は、焼け野原になっており、親戚や小学校の頃の友人も犠牲になりました。国家というものを考える時、いつも自分の敗戦体験を思い起こします。

99年の周辺事態法以降の日本の動向は、戦前と非常に似てきています。破局というものは一挙に来るのではなく、徐々に来るのです。そして気付いた時には、いつの間にか取り返しのつかない状況になっています。最も重要な役割を果たすのは、マスコミと教育だと思います。教育によって、軍国少年も、平和を築いていく人間もつくられます。戦争への道を開くのも、また平和への道を切り開いていくのもマスコミと教育です。戦前の反省から戦後のマスメディアはスタートしたはずですが、今はそれを忘れているように見えます。国民の側に立った報道をさせるために、市民はマスコミを叱咤激励し、真実の報道を要求していくべきです。

また、「戦争はいけない、だから今の平和を守ろう」という現状維持的な平和主義に留まってはなりません。平和を脅かす貧困、病気、人権侵害、環境問題などを一つずつ解決していくことが大事です。核廃絶は最終目標ではなく、どのような社会をつくるのかという目標を持って初めて、私たちの運動が力を持つのではないか。私たちが目指すのは、豊かで公正で、誰もが安心して暮らせる社会をつくっていくということです。

（「核兵器・核実験モニター」323・4号にインタビューを掲載しています。）

## 土山秀夫さん：「若い世代は果敢にチャレンジを」



私は1943年に医学生になりましたが、45年の10月から軍医学校を経て前線に送られることが決まっていたため、当時は死を覚悟していました。学校の教授陣は欧米留学から帰ってきた人たちがばかりで自由な気風がまだ残っており、患者さんの命を一秒でも生きながらえさせるための処置を熱心に教え、たとえ敵の傷病兵であっても同じように治療すべきと教えてくれました。ところが配属将校からは、一人でも多くの敵兵を迅速に殺す方法を学ばされました。矛盾に悩みましたが、小さな頃から繰り返し鼓吹されていた軍国主義のマインドコントロールは私の思考を停止させ、次第に両方を受け入れるようになっていきました。

45年8月7日、病弱のため佐賀県の遠縁の家に疎開していた母が危篤との電報があり、2番目の兄と2人で出かけました。母は奇跡的に病状が持ち直していましたが、ラジオから「長崎に新型爆弾投下されり。損害は軽微なる模様」とのニュースが流れました。大変ふざけた話ですが、それが当時の軍の発表だったのです。長崎には長兄家族がいたため、母に説得され、とんぼ帰りしました。長崎の街は根こそぎえぐられ、赤茶けた煙があちこちに立ち昇っていて、とてもこの世のものとは思えない状況でした。私は救護班に入りましたが、医薬品も包帯も底をつき、ただ死にゆく人たちにバケツの水を飲ませてあげることしかできませんでした。私はその時ほど、医学の無力さを感じたことはありません。

爆心地から250メートル付近の我が家を探しに行くと、梁の下敷きになり、顔が黒焦げの兄の死体を見つけました。すぐ近くに兄嫁と5歳と3歳の子どもの白骨体があり、一家の全滅を確認しました。こうして廃墟の中、8月15日を迎えました。その時は悔しいよりも、何か心の中にとぼかりと穴が空いたような虚脱状態というのが正直な気持ちでした。

敗戦後は病理学を専攻し、研究に没頭しました。助教授から教授時代にかけては大学紛争があり、学部長や学長という管理職

■ 総会記念シンポジウムに参加して . . . . .

宮野史康 (明治学院大学国際学部3年)

私がピースデポを知ったきっかけは、ゼミの先輩であり現在ピースデポ事務局スタッフの塚田さんから、昨年8月のピースデポの広島・長崎ツアーに参加しないか、と声をかけていただいたことでした。それ以来、ピースデポの「軍事力によらない安全保障体制を目指す」という姿勢やそのスタイリッシュな雰囲気共感し、また私たちのような学生に多くの勉強の機会を与えてくださるため、積極的に関わらせていただいています。

今回の総会記念シンポジウムは、タイトルにある“次世代”という言葉が示しているように若い世代を強く意識したものであったようで、普段から「New Generationはおれだ!」とか口走ってしまっている上に、塚田さん、中村さんに質問タイムには質問をしてという“プレッシャー”をかけられていたため、若干緊張して参加しました。

平岡敬さんは燃える情熱家といった方で、熱のこもった口調で私たちの心に直接訴えかけてくるようなお話を聞かせてくださいました。終戦時に、「国家と民衆」を目の当たりにしたという実体験は非常に説得力があり、戦争を知らない世代の私たちと比べより確固たる平和を願う気持ちが存在するのだろうと思わざるをえません。私たちにってはやはり想像力を働かせることしがなく、実体験を持たない私たちの信念はもしかすると簡単に揺

らぎかねない、そうならないためにもより一層強固な意志で強く思い続けたいとけいな、と感じました。

土山秀夫さんは、まさに冷静沈着といった方で、非常に落ち着いた語り口で理性に訴えかけてくるようなお話でした。御自身の市民サイドからの活動の実績は素晴らしく、その土山さんが私たちのような若者に期待と希望を抱いてくださっているということは、非常に励みになりました。全体としては、平和への決意を新たにすることができた上に、私たち若者は平岡さん、土山さんに応援をしてもらっているんだ、と感じることができました。

私は、来る5/4～5/15にNYの国連本部で開催されるNPT再検討会議準備委員会にピースデポの方々や、ゼミの高原孝生先生とともに参加します。その会議に合わせて今、大学内では「学生から“核のない世界”に向けての2ヶ月」という勉強会、講演会などからなる企画をピースリングというサークルで開催しています。その中に横断幕を100人の手で作ろうという「100人の横断幕」企画があります。いろいろな方に作成の過程に参加してもらい、その思いを私たちに託していただくというもので、完成したものを現地に持って行く予定です。現地では、英語がペラペラなわけでもなく大して知識もない私が参加してもほとんど役に立たないと思いますが、そこは発想の転換で自分自身の勉強のためにはとても大きなチャンスとなると確信しています。

「高校生平和大使」OGの大川史織さんは、国連本部訪問の際のエピソードや、大学での活発な平和活動を紹介してくださいました。



【編集後記】 総会報告号の今号は、たくさんの“声”をお伝えできる内容になりました。掲載をご承諾いただいたみなさまに感謝いたします。(塚田)

の時にはそれに忙殺され、核兵器問題を考える余裕はありませんでした。しかし頭の隅で、あの原子野の光景はいつまでも記憶から離れることはなく、国際政治や安全保障の議論を一から学びなおし、被爆地の立場からの論文を『世界』や『中央公論』、『論座』などの雑誌に次々と投稿していました。私が実際の体験に入ようになったのは、98年にインド・パキスタンの核実験を契機に日本政府が開いた「東京フォーラム」の市民集会を立ち上げた時からです。その経験を継続させる形で首都圏、広島、長崎のそれぞれのNGO活動を続けることになりました。2000年1月に「核兵器廃絶ナガサキ市民会議」を立ち上げ、11月に県、市と共催で第1回目の「核兵器廃絶地球市民集会ナガサキ」を開催し、延べ5600人の市民の方々が参加して熱心な議論が行われました。来年2月には第4回の地球市民集会を開く予定です。また、これまでに「世界平和アピール七人委員会」や「長崎県九条の会」の活動にも取り組んできました。

長崎では「高校生1万人署名活動」が若い世代の代表的な活動で

す。高校生平和大使は毎年集めた署名をジュネーブの国連本部に届け、英語のスピーチで自分たちの意思を伝えます。昨年まで11年継続し、36万人以上の署名を届けています。最初は確かに大人が呼びかけた運動だったかもしれませんが、今は完全に高校生自身により、次々と後輩を呼び入れる自主的な活動に移っています。

平和とは、ただ戦争がないだけでなく、貧困や飢え、環境破壊や人権侵害、差別などがなくなって初めて達成されます。こうしたものは私たちの日常生活の周辺でも、いくらでも見つけることができます。若い人たちが果敢にチャレンジすることは、日中戦争以来の310万人の犠牲の上に得られた精神の自由というものを、再確認できる営みにもなるのではないかと思います。

一方で、来年の5月は国民投票法が施行されます。どの政権になろうとも、改憲論者が多い現状で、問題が表面化してからにわか騒いでもうっかりするとそのペースに巻き込まれていく可能性があります。これは決してイデオロギーの問題ではなく、日本の今の平和な時代を持続できるかどうかの分岐点だと思います。

- ①「【核兵器はなくせる】 ピースデポ特別顧問・梅林宏道氏に聞く 対北朝鮮緊張緩和を」(中国新聞、09年4月8日)
- ②「【識者評論】 NPO法人ピースデポ特別顧問 梅林宏道 前途多難なオバマ核廃絶構想」(【共同】高知新聞、09年4月8日)
- ③「【時代の肖像】 NPO法人ピースデポ代表 湯浅一郎さん 情報と行動で「壁」動かす」(北海道新聞、09年3月16日)
- ④「【非核宣言条例化を】 奈良で中村さん 市民の運動を提案」(奈良新聞、08年7月7日)
- ⑤「【広島発言2009】 NPO法人「ピースデポ」代表 湯浅一郎さん 科学の進歩は「善」なのか、を問う」(毎日新聞、09年3月26日)

⑤ 2009年(平成21年)3月26日(木) 22

### 科学の進歩は「善」なのかを問う

広島 湯浅一郎さん(59) NPO法人「ピースデポ」代表



「科学の進歩は善なのかを問う」と題して、湯浅一郎氏が科学の進歩と人間の倫理について語る。核兵器の開発や遺伝子工学の進歩がもたらす社会への影響を懸念し、科学者が責任を担うべきだと訴えている。

① 2009年(平成21年)4月8日(水曜日) 17

### 対北朝鮮緊張緩和を

ミサイル発射 監視の枠組み提言

ピースデポ特別顧問 梅林宏道氏に聞く



北朝鮮がミサイルを発射した際、国際社会がどのように監視を行うべきかについて、梅林宏道氏が提言している。透明性の高い監視体制の構築を主張している。

② 2009年(平成21年)4月8日(水曜日) 16

### 前途多難なオバマ核廃絶構想

識者評論 NPO法人「ピースデポ」特別顧問 梅林宏道



オバマ政権の核廃絶構想について、梅林宏道氏がその実現可能性と課題を分析している。核廃絶の道は非常に険しいと指摘している。

③ 2009年(平成21年)3月16日(月曜日) 16

### 核軍縮と平和 運動の原点は何ですか

NPO法人ピースデポが新代表 湯浅一郎さん(59)



湯浅一郎氏が新代表に就任したNPO法人ピースデポの活動方針と、核軍縮と平和運動の原点について語っている。

④ 2008年(平成20年)7月7日(日) 16

### 非核宣言条例化を

奈良で 中村さん 市民の運動を提案



奈良市で中村健司氏が「非核宣言条例化」を市民に提案し、運動を呼び掛けている。

⑤ 2009年(平成21年)3月16日(月曜日) 16

### 情報と行動で「壁」動かす

時代の肖像 NPO法人「ピースデポ」代表 湯浅一郎さん



湯浅一郎氏が「情報と行動」を通じて社会の壁を動かす活動について語っている。